

# 神社祭祀の伝承力

美保神社と佐太神社の祭祀から

関沢まゆみ

The Power of Tradition of Shrine Rituals : Rituals at Miho and Sada Shrines  
SEKIZAWA Mayumi

はじめに

① 美保神社の祭祀

② 佐太神社の祭祀

論点

## 【論文要旨】

これまでの民俗学における神社祭祀の研究は、比較的有名な神社における祭祀の研究（和歌森太郎の『美保神社の研究』など）と、小さな村落の氏神の祭祀の研究（肥後和男の『宮座の研究』など）とが併せ行なわれてきた。本稿では前者のようなやや大きな神社で、その神社に所属する神職集団が存在しながらも、地域社会の住民たちが参加して継承されてきている歴史の古い神社、島根県松江市美保関町美保関の美保神社と島根県松江市鹿島町佐陀宮内の佐太神社の、それぞれの祭祀の担い手に注目し神社祭祀の現場における伝承の力をめぐる分析を試みた。本稿の主要な論点は、以下の三点である。第一、神社には独自の一年の時間が存在する。美保神社では春の青柴垣神事に始まり、冬の諸手船神事に終わる一年の循環であり、佐太神社では秋の御座替え神事で清められた後、一月の神在祭で神を迎えて新しい一年が始まるという循環性である。第二、美保神社の青柴垣神事と諸手船神事、佐太神社の御座替え神事と神在祭との両者に共通するのは、美保関の人々にとっては春の青柴垣神事を行なうことが彼らの自己確認であり、その存在証明、佐太神社では御座替え神事と七座神事、

そして神在祭を行なうことがそれであるといつてよい。そのために、美保関では頭筋、佐太神社では社人という伝統的な旧来の家柄の意識は伝えながらもそれだけにこだわらず、自発的に奉仕を希望する人物を新たに迎え入れることによって祭祀の伝統を維持継承していこうとしている。第三、神社祭祀はそれに携わる人びと個々人の「奉仕の心」に支えられており、その奉仕の心の獲得のためには、集団的に共有される一定の環境設定が必要である。そして同時に、個々人の初発の意思とその後継承される経験の中で獲得される技術と信念とにより、それは実践者一人ひとりの自己確認とその存在証明ともなっている。つまり、神社祭祀の伝承世界で継承されているものとは、眼に見える技術や技能であると同時に眼に見えない意識や心意なのである。そして、これらの伝承現場から読み取ることができるのは参加者個々人とその集団的な思惟と行動の中に見出される「独自性と共有性」という枠組みの中で再生産されている創造性に満ちた伝承力である。それは明治初年の社人組織の解体という神事祭祀の伝承の危機を救った力でもあった。

## はじめに

日本の神社には、その歴史の上からみても、その組織のうえからみても、実に多様な形態が存在する。歴史の上でははるか古代に創祀され、その後長く継承されてきている伊勢神宮や出雲大社のような古社もあれば、近代に創祀された明治神宮や靖国神社もある。組織の上でもそれら大規模で専門の神職集団が歴代奉仕してきている神社もあれば、個々の村落の氏神や鎮守として地域社会の人たちがその祭祀の主たる担い手となっている神社もある。これまでの民俗学における神社祭祀の研究は、たとえば和歌森太郎の『美保神社の研究』（国書刊行会 一九五五年）などのように比較的有名な神社における祭祀の研究と、肥後和男の『宮座の研究』（弘文堂 一九四一年）や原田敏明の『村の祭祀』（中央公論社 一九七五年）などのように小さな村落の氏神の祭祀の研究とが併せ行なわれてきた。筆者はこれまで後者のような村落の氏神の宮座の研究を中心として実施してきたが、本稿では前者のようなやや大きな神社で、その神社に所属する神職集団が存在しながらも地域社会の住民たちが参加して継承されてきている比較的歴史の古い神社の祭祀について調査と分析を試みてみることにしたい。そこで、鳥根県松江市美保関町美保関の美保神社と鳥根県松江市鹿島町佐陀宮内の佐太神社という二つの神社に注目してみる。なお、本稿は本基幹研究へと連続する映像論文「出雲の神々と祭り」第一部美保神社、第二部佐太神社（国立歴史民俗博物館民俗研究映像二〇〇三年度）の作成の段階から継続している調査内容をもとに論文化したものである。

## ① 美保神社の祭祀

関の五本松で知られる美保関の美保神社は美穂津姫命と事代主神を祭神とする神社であり、全国の漁業関係者からあついで信仰を集めている。よく知られた大規模な祭祀は四月七日の青柴垣神事と一二月三日の諸手船神事である。これらは記紀の記す事代主神の神話にちなむ神事として伝承されているものであるが、その歴史的、実証的追跡は文献資料の不足から困難である。現在の年間祭事はこの二つの祭祀以外にも表1にみるように非常に多く複雑である。この美保神社の祭祀についての研究としては前述の和歌森太郎のそれがつとに有名であるが、筆者も拙稿「神社祭祀と宮座運営―美保神社の祭祀の分析から―」（『宮座と幕制の歴史民俗』吉川弘文館 二〇〇五年）を提出して主として宮座の祭祀組織の分析を試みている。本稿はそれに続いて美保神社の祭祀を支える人びとの行動と心意に注目しそこから伝承を支える力についての分析を試みるものである。

### （1）宮座組織と頭家の位置づけ

三種類の頭家・頭人 美保神社の祭祀は、神社の神職組織が執行すると同時に、美保関の住民たちが組織する宮座が参加するという両者の協業によってなされてきている。住民たちの宮座では、その構成員である各家の数え年の一五歳以上の男子は、四月の青柴垣神事が終わって一の頭家と二の頭家の二名の神籤があがって指名されると、その頭家の役を受けて一年間は毎日美保神社に参拝し精進潔斎につとめて、翌四月の青柴垣神事で頭家をつとめる。そして、それが終わると準官となる。その後、三三歳から五七歳までの間に再び神籤があがって客人頭の役を受ける。客人頭も一年間は毎夜神社に参拝を続けて精進潔斎につとめる。そして、これがつとめ終わると、休番、上席休番という二年間の頭人見習い期間がある。そして、三年目に頭人の役を一年間つとめる。それによって上官となり、その上官のなかから六名が世話人として選ばれて、

頭家、客人頭、頭人の助言者となり、神事の世話をする。それは図1に示すとおりである。

このように美保神社の祭祀に奉仕する住民たちの組織する宮座には、青柴垣神事の中心となる二人の頭家と、諸手船神事の中心となる客人頭、それにそれらを含めた宮座神事の中心となる頭人と、あわせて三種類の頭家・頭人が存在する。その関係は複雑であり、慎重な調査と分析が必要である。

和歌森太郎の『美保神社の研究』ではそれらについて、青柴垣神事の頭家夫婦を「神の憑依役」として神聖視し、頭人というのは後次的に発生したものであると論じている。和歌森は美保関の宮座では一の頭家と二の頭家および頭人も「神主」と呼ばれていることについて、一の頭家と二の頭家については「頭家神主」、頭人については「一年神主」という表記で区別しており、頭家が主となる青柴垣神事における頭人との役割分担の実際から、頭人の方を後次的発生と位置づけているのである。そして頭家神主と呼ばれる男性とオンド（小忌人）と呼ばれるその妻との夫婦二人と、トモド（供人）と呼ばれる娘によって青柴垣神事への奉仕が行なわれる点に注目して、「神懸かる者としてのオンド」と「神懸からせる司祭者としての頭家神主」という関係性でそれを読み解こうとしている。そして「司祭権が斎家たる頭家の人に属していた時代があったのではないか」と述べて、古代の氏族社会において族長が司祭者であったそのあり方との共通性をみようとしていた。和歌森によれば、古代、神が一族集団の氏神として存在していた時代にお

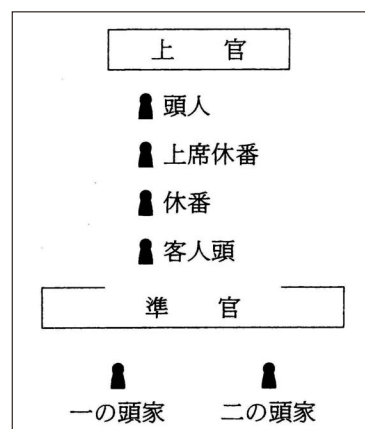


図1 美保神社の宮座組織

いて、依代は身内の者から選ばれ、それを中心に祭が行なわれていたが、古代から中世にかけて輪番制をもって祭祀を行なうように変化していった、そして、中世以来、一般に年寄層が重い役割を占めるようになると、成年期に入る段階においては神饌調達、奉幣、神がかりなど斎屋の主としての頭家神主をつとめ、次にオトナに入る段階においては神事主宰者としての一年神主をつとめるように、職掌分担がなされるようになったのだという。この和歌森の解釈は、氏神祭祀の歴史の変遷を前提としており、現行の民俗としての頭家のあり方に古代の祭祀者の姿をみようとしたものであった。しかし、そのような古代から中世、近世、そして近現代へとという長い歴史の変遷を具体的に裏づけ証明する資料は存在せず、その解釈はただ推測によるものに過ぎなかったといってしまう。

**加入儀礼の視点から** たしかに、頭家が青柴垣神事においては白粉を塗り、目を閉じて大柵の前に座し、蝶形ちようけいの扇に「おかげ」を込めては次々と参拝者に授けていく姿や、御船みふねで行なわれる秘儀の後、頭家に向って参拝者が柏手を打ち拝む姿をみていると、聖なる神役をつとめているかのように見受けられる。しかし、宮座組織における頭家の位置づけをよくみると、それは準官への加入儀礼としての神がかり体験という意味を見出すことができる。ここではふつうの若者が神がかり体験という異常体験を経ることによって、神祭り役の宮座の座員としての資格を得る過程ととらえることができる。

頭屋のつとめの後にその役につく客人頭は、客人社の世話役であり諸手船神事の中心的人物である。これも重い役であるが、それは宮座の構成全体からみれば、次に頭人となるための資格を得るための役と位置づけることができる。そして、頭家も客人頭も、頭人の総括のもとで宮座の一定の役割を担わされているものといえる。そして、その頭人の役割でさえも宮座の組織全体のなかでみれば、次の上官への加入儀礼として位置づけられるものである。



**神社とともにある日常生活** 美保関は日本海の荒波を避ける天然の立地にあり、美保湾へと開かれた湾岸の美保神社の近くに集落があり、人びとの日常生活においても「神社のおかげ」ということが強く意識されている。人びとの語りの中でも信仰的な要素が色濃くみられるのがその特徴である。たとえば、漁船を出して出漁するときでも、必ず船上から美保神社に向かって柏手を打って拝礼を行ない、帰港した時にも同様に柏手を打って拝礼するのが習慣となっている。また、神社の前を通るときにもちよつと頭を下げて拝むのも習慣となっており、挨拶もなく通り過ぎる者はいない。神社の御供のお下がりには「おかげ」があるといつて、漁に出るときや旅行に行くときなどに、その御供と呼ばれる米を少しま



写真1 青柴垣神事。大櫓飾りの前の一の頭家と二の頭家。



写真2 御船からおりた頭家

ぜて炊いたご飯を食べていく。そうして祈願しているのも事故には決してあわないという。このように美保関の人びとの日々の生活は美保神社とともに営まれているといつても過言ではない。日常生活における世俗的な経済活動と神社への信仰や祭祀への奉仕活動とがあたかも入れ子細工のように組み合わさって展開しているのが美保関の生活環境であり、それが背景となつてこそ、頭家の神がかりというような一種の異常な宗教的体験も共有的に伝承されているものと観察される。一五歳を過ぎた若者が一人前の宮座の座員つまり聖なる神祭りの担い手となる条件として頭家の役と神がかり的体験が要求されているのである。

## (2) 神社と宮座との関係

美保関の宮座は美保神社という古社とともに存在している点が特徴的である。この神社と宮座の関係について分析を行なったところ、以下のような宮座の成員、頭人の役割、宮座と神社、宮座行事と神社の年間行事との重層性、などについての特徴を析出することができた。

**宮座の成員** 宮座を構成する家々の男子にとってはじめてのつとめとなるのが前述のように青柴垣神事の頭家である。もしこの神籤が父親よりも息子に先にあがった場合、子供のほうが父親より宮座内での臍次が上位にくることになる。それを防ぐために、息子が頭家をつとめて準官に加入する時に、父親も一緒に準官に加入することができる慣例が作られており、これをヒキドと呼んでいる。ただし、次の準官の中から客人頭の神籤があがるとき時には、本人が客人頭をつとめる意思を明確にし

ていることが条件である。

準官への加入のヒキド願いを上官と準官とで確認すると、それを頭人が美保神社の宮司に提出して、神社側の検討を経て承認されることになっている。そして五月五日の神迎え神事において、親子で準官入りの挨拶を行なうのである。

**頭人の役割** 客人頭の神籤があがって、一年間精進潔斎して客人頭のとつとめを果たしたその二年の後に、頭人をつとめるのが決まりである。昭和三十八年（一九六三）までは頭人になると、四月一日に自宅の二階に頭人宮を受け継いでまつていた。しかし、現在では神社の参道脇にある神事会所の近くに頭人宮を常設している。それは、従来は頭人をつとめる家ではそのような自宅の設営が求められ、かつそれが可能であったのが、昭和三十八年ころには頭人の家筋においてもそれが困難となつてきていたからである。現在では、四月一日にその頭人宮のあらためを行なった後、神事会所に頭家、客人頭、休番、上席休番らの役前と上官を招いて頭人の烏帽子着の祝いを行なう。そしてその日の夜に、拝殿で旧頭人の納めの神楽が行なわれ、その後、頭人宮で世話人の立会いのもと、新旧頭人の間で、頭人が神社に毎晩お参りする時の唱え言が間違はなく唱えられるかどうかの確認と、頭人の妻に対しても一年間の心がけの申し渡しが行なわれる。そうして、新頭人は黒の大紋に着物を着替えて帰宅する。その翌一二日には、美保神社の宮司が新頭人に頭人の任命書を渡す。ここで注目されるのは、宮座の一年神主とも呼ばれる頭人が、その四年前に宮司の神籤によって決まり、さらに宮座の世話人による口伝の確認や披露目が行なわれた後に、神社より頭人の辞令が出されるという点である。この任命書について宮司によれば、敬神講社の大世話係として美保神社を信仰する人を拡張する任を託す意味があるという。

美保神社は漁業関係者からのあつち信仰を集めているが、なかでも桐箱に納められて封印されている波剪御幣なみきりごへいはとくに重要な御幣とされている。

る。しかもこれはかつては頭人によって作られ、全国に発送されていたという伝承が聞かれる。頭人にはその祈念料でなかなかの高収入が得られたという。また、戦時中には出征兵士の写真を添えた手紙が全国から頭人のもとへ送られてきて武運長久の祈念が依頼されたり、氏子から特別に祈念を頼まれると「御伺い」といって、頭人は夜中に潮かきをして神社への参拝をした。そして「おさとし」が出るまで何度も繰り返したという。「おさとし」が出ないと「見えない」といってまた海に入って潮をかき、それから神社への参拝を行なっていたという夫や父親の思い出を語る人がいまでも少なくない。

しかし、戦前、現宮司の先代にあたる横山清丸宮司の時に、氏子側の組織を神社の傘下に入れる改革を進めたといわれており、頭人の波剪御幣もこのとき神社へと委譲されたものと推測される。そのように頭人の役割の一部が美保神社の宮司の役割へと移行したことについて、和歌森太郎は前掲書で「今日、一部の氏子の意識乃至主張では、一年神主こそ昔はこの神社の正神主であり、今の宮司のするようなことを営てはしていたのだという。事実、昔一年神主がなしていたことを今では宮司が行なっている面もあることはあるけれども、そうかといって横山家が一年神主に全くとって代わったとはすぐに言いきれぬものがある」（九四ページ）と慎重な言い方をしながらも、昭和二〇年前後の聞き取りから、青柴垣神事るとき一の頭家と二の頭家とに上官を二分する人別けの儀や四月八日の後宴祭において新客人頭を決める神籤の振り上げはもと是一年神主によって行なわれていたと記述している。

頭筋の家々が組織している宮座と、宮司を中心とする神社側と、両者の間の確執は明治時代にもあったことが氏子側には言い伝えられている。福岡和子氏（大正一四年（一九二五）生まれ）は夫の宏氏（大正一五年（一九二六）生まれ）から「美保神社に反旗を翻してできたのが頭人に代表される頭家制度だと聞いている」ということを何度も聞か

れたという。明治以降の国家神道の体制下で、伝統的な宮座祭祀と神社経営との間で少なからぬ軋轢があったことが推察される。

**宮座と神社** このように宮座の組織と運営に対する神社側からの関与についてみると、頭家や客人頭を決める神籤の振上げや頭人の任命などが宮司によって行なわれる点、またヒキドと呼ばれる方式による新しい宮座の成員の承認も最終的には宮司の判断による点、などから、現状としては、神社の宮司、禰宜以下の神職組織の存在を宮座の上位組織として位置づけることができる。

**神社と宮座の年間祭事** 美保神社の主な年間祭事（表 1）と宮座の年間祭事（表 2）を整理してみると、美保神社の代表的な神事である青柴垣神事の日には神社では例祭（大祭）が行なわれ、諸手船神事の日には新嘗祭（大祭）が行なわれている。また五月の神迎え神事、八月の虫探神事は神社の祭事暦のなかでも古伝祭として位置づけられており、これらは神社で行なわれる神事であると同時に宮座の神事でもあり、それらが重層的な組織関係で行なわれていることがわかる。

美保神社の祭祀は、明治以前には、横山宮司家を中心に社家屋敷、社人屋敷（五軒）、巫女屋敷（五軒）の人々によって行なわれてきた。巫女の家は、奥市、宮市、雅楽（うた）、音頭（おんどう）、周防（すおう）の五軒であったが、雅楽は中世に絶えて明治以前は四軒で傳承されてきていたが、現在では青柴垣神事と諸手船神事の神饌の調理を周防家と宮市家で奉仕しているだけである。美保関は漁業が中心であり、水田はないが、それでも御

表 1 美保神社の主な年間祭事

月 日	祭 典 名	月 日	祭 典 名
1. 1	歳旦祭（併）元三祈願祭*	12	船霊社祭
2	日供始祭（併）元三祈願祭*	14	天王社祭
3	元始祭（併）元三祈願祭*	16	幸魂社祭
4	新年大御饌撤下〈古〉	旧 6. 14	沖ノ御前大漁祈願祭
7	月次祭、昭和天皇遥拝式	旧 6. 15	恵美須社祭（清水ヶ浦）
13	水産神社初恵美須社、初恵美須社	旧 6. 15	和多津見社祭
14	望粥献上、爆竹式*〈古〉	旧 6. 17	筑紫社祭
15	成人式	8. 1	月首祭、浜恵美須社祭
2. 1	月首祭	7	虫探神事*〈古〉、月次祭
3	節分祭*（朝の儀・夕の儀）〈古〉	22	糺社祭
7	月次祭	9. 1	月首祭
11	紀元祭*	7	月次祭
初午	初午献供	15	敬老祭
17	祈年祭（併）敬神講社春季大祭	23	秋分祭
22	糺社祭	10. 1	月首祭
3. 1	月首祭	7	月次祭
7	月次祭	10	体育祭
21	春分祭	15	漁幸祭*
4. 1	月首祭	17	神宮祭
3	神武天皇祭遥拝式	28	久具谷社祭
7	例祭、青柴垣神事*	11. 1	月首祭
13	漁幸祭*	3	明治祭
28	久具谷社祭	7	月次祭
5. 1	月首祭、客社祭	23	勤労感謝祭
3	憲法記念祭	28	地主社祭
5	神迎え神事*〈古〉、子供祭	12. 1	月首祭、天神社祭
7	月次祭	3	新嘗祭*、諸手船神事*
6. 1	月首祭（併）五穀豊穰祈願始祭	7	月次祭
5	端午の節供粽献上	13	水産神社例祭
7	月次祭	23	天長祭
30	五穀豊穰祈願終了奉告祭、大祓祭*	25	大麻頒布祭、釜祓祈禱
7. 1	月首祭	31	大祓式*、神楽納、大御饌供進
7	月次祭、市恵美須社祭		

平成 11 年美保神社祭事暦より作成 \*印は宮座の行事としても位置づけられているもの  
なお毎月 1 日の月首祭と 7 日の月次祭には頭人が参列する。〈古〉：古伝祭



表2 宮座の年間祭事

月 日	行 事 内 容
4. 7 8 9 11	青柴垣神事の頭家の当差し 客人当の当差し 一度祭 新頭人の引継ぎ。 御注連掛け（頭家宅）。新頭人が頭人宮を引継ぎ、神事会所で烏帽子着の祝いを行なう。神社で頭人の納ノ神樂が行なわれた後、頭人宮への新旧頭人が参籠し、世話人の立会いのもと唱え言の確認と頭人の心構えが言い渡される。
12 13	宮司により大世話係（頭人）の任命がなされ、新頭人見参神樂が催される。 漁幸祭
5. 1 5	御注連掛け（頭人宅） 神迎神事。 午前3時に神職、頭人以下役前が船に乗って、沖の御前と呼ばれる小島に行き御注連掛けを行なう。4時半頃、正装した小忌人らの出迎えを受け、神社で御祈念神樂があげられる。午後1時頃後宴祭が行なわれる。
6. 30 8. 7	大祓式 虫探神事、氏子祭。 神社の拝殿で巫女が神社の神宝である面をつけて舞った後、宮司がそれを和紙でふいて、あらためて納める。頭人以下役前はこれに参列した後、頭人宮に下がって、御神体の面を出して和紙でふいて再び納める。
10. 15 12. 1 2 3	漁幸祭 御注連掛け（頭人宅・客人頭宅）。諸手船神事行事に入る 宵祭 午前9時30分、新嘗祭。 11時30分、客人社祭。 頭人、客人頭ほか役前が神社に参集し、神職らと客人社へ参進する。 午後1時30分より諸手船神事。 上官と準官は神事会所で芋膳と甘酒等をいただき、神社に昇殿する。神籤によりマッカ持ち1人、大權1人、大脇1人、權子（かこ）6人ずつ2組が決められる。会所に下がって、着替えて、再度神社に集合する。宮司が宮の灘で見守るなか、二船によって船漕ぎ競争が行なわれる。マッカ持ちが二の鳥居まで走り、神職にマッカを渡すと、もう一度船漕ぎの競争が行なわれ、大權役の者が宮司に「タカー三度、乗って参って候」と告げると、宮司が「タカー三度、目出とう候」と答える。この応答の後、港廻りが行なわれる。
4 31	一度祭 大祓式
1. 1 2 3	歳旦祭、元三祈願祭 元三祈願祭 元三祈願祭
14	爆竹祭
2. 3	節分祭
旧1. 5 11	頭人習始 紀元祭
3. 30 31	青柴垣神事に入る。上準官帳届を出す 神樂参籠（頭人、両当家）。両当家は午後、下灘で潮掻きを行なう 夜11時と12時頃、「明日は御祭初めで御座るトーマー」と言いながらふれる。
4. 1	御祭初め。 午後1時、役前と上官が神社所用の場所へ参集する。上官は礼服を着用する。 人別式。一の頭家の世話人と二の頭家の世話人と上官が立会い、頭家の縁故調べを行ない、宮司の裁断によって上官を一の頭家の手伝いと二の頭家の手伝いとにわける。その後、御酒、御飯、ご馳走がふるまわれる。 神事会所に御棚を組み立てる。当家は青柴垣上準官帳（案内帳）を作成する。 粉碎を行なう。
2	仕事日。上官と準官が神事用祭具を作る。 揉火で一の頭家、二の頭家が餅を搗く。餅が搗けるまでに竹の串など祭具を作る。また午前9時頃、両当家は弁天島に船で行き、トコロ（野老）芋を洗う。
3	仕事日。上官と準官が竹細工と紙細工を作る。
4	仕事日。これまでに作った竹細工の籠に餅を入れる。
5	午前中、両当家は才浦に行き、潮掻きを行なう。 午後、1時頃から頭人以下上準官の総振舞が神事会所で行なわれる。 神事会所入口に男柱が建てられ、夕刻、社務所からオーハギ（御祓解）と呼ばれる御幣が下がる。午後6時から養成部で習礼が行なわれる。頭家と客人当の志願帳届けを作成する。
6	朝9時より神事会所に御棚飾りを行なう。 両当家が相互に御棚を拝礼する。頭家で烏賊・昆布と御酒、芋膳が振舞われる。その後養成部で飯酒の馳走があり、午後2時頃解散となる。そして夜、神社で宵祭が行なわれ、その後、蝶形の扇を御船に乗せて一晩籠る御船神事が行なわれる。「明日は御祭で御座る。トーマー」と言って祭りの始まりが知らされる。
7	大祭。青柴垣神事。 午前8時から頭家と小忌人、供人は大棚の前に正座して、人々の参拝を受ける。頭家は蝶形の扇を次々と手に持ち、次々と崇敬者に頒布する。外では、10時から警固が七度半の使いを始める。七度半の時に二の頭家が神門まで宮司を迎えに上がる。神事会所において御注連掛けが行なわれ、烏賊・昆布と御酒、芋膳が出され、終わると神立となる。御鈴を解き、一の頭家と二の頭家が奉幣の練習を行ない、それぞれの御船へ乗る。小忌人は白い被ぎをかぶり、達者に背負われて、供人とともに乗船する。御船での秘儀が終わると、拝殿で頭家の奉幣の式が行なわれる。この後、宮司によって頭家の当差しが行なわれ、達者が当りの家へ当指餅を届ける。新頭家は潮かきをして、袴を着け、六社参りを行ない、神事会所に来る。その後、頭人をはじめ上官と準官が新しい頭家の家にお祝いに行く。

この他、毎月1日深夜零時に頭人は頭人宮を開けに行き、烏賊・昆布、御神酒を上げる。その日は氏子が頭人宮に参拝する。

供が供えられるのは、近世には松江藩から祭祀料が奉納されていたためである。現在は氏子が米を用意し、神社の方で切り餅やミカン、蠟燭、甘酒などを用意している。

**宮座の一年** ここで宮座の一年を概観してみる。宮座の年間行事のなかで、四月一日、五月一日、十二月一日に御注連掛けという行事が行なわれている。世話人が、四月一日は翌年の青柴垣神事の頭家と頭人の家の神棚に注連縄をかけ、五月一日は五日の神迎え神事を前に頭人の家の神棚に注連縄をかけ、十二月一日は三日の諸手船神事を前に客人頭の家と頭人の家の神棚に注連縄をかけるのである。この注連縄によってそれぞれの神事の主催者の家を表わしているといえる。なお、青柴垣神事の直前、英月五日に頭家（現在は神事会所）の入口に男柱が建てられると、そこにはオーハギと呼ばれる御幣が神社から届けられて飾られて、清浄な結果が示される。

また、これら青柴垣神事と神迎え神事と諸手船神事の直会においては御神酒のほかに甘酒が用いられるが、青柴垣神事の甘酒は頭家が、神迎え神事の甘酒は頭人が、そして諸手船神事の甘酒は客人頭がそれぞれつくって、振舞うことになっている。

そして四月七日の青柴垣神事後の九日と、十二月三日の諸手船神事の翌四日には、世話人が主宰する一度祭<sup>いちまつり</sup>が行なわれる。それぞれつとめを果たした頭家と客人頭の家で行なわれる祭りであるが、それには神社の関与はない。これはすりこぎを男根に見立てて、それを浴衣に包んで頭家の妻に抱かせる性的な要素がみられる祭りである。それまでの頭家の慎みが解かれることを表現しており、頭家のつとめが無事に終わったことを家族にも実感させる意味も含まれた祭りである。

旧正月五日に新しい頭人の習初め<sup>ならいぞ</sup>が行なわれる。頭人が新しい頭人に毎日の神社参詣の際に、鳥居、境内の末社、拝殿などでそれぞれ唱えることとされている祈りの言葉を口伝で教えるのである。この口伝が正確

に伝えられているかどうかは、四月一日の夜、頭人宮で世話人の立会いのもとで確認が行なわれる。

旧暦の頃にはこのように正月が明けるとすぐに新しい頭人の修行が始まり、旧暦三月三日の桃の節供の季節に青柴垣神事が行なわれて宮座の一年が始まり、旧暦霜月の中の午の日に冬の諸手船神事が行なわれて宮座の一年が終わるというリズムがあった。明治六年（一八七三）の新暦採用の後もしばらくはこの旧暦で年間行事は執行されていたが、明治一八年（一八八五）に国幣中社に昇格した後、青柴垣神事は新暦の四月七日に、諸手船神事は十二月三日に固定され、伝統的な季節感が失われたといわれている。現在も頭人の口伝伝授だけは旧暦正月に行なわれている。ここで注意されるのは、この美保神社の一年は、旧暦三月の青柴垣神事で一年が始まり旧暦十一月の諸手船神事で一年が終わるという循環である。正月を中心として一年がめぐる一般的な年間暦の循環ではなく、美保神社には美保神社の春三月と冬霜月とに基準をおく固有の一年の循環が存在しているのである。

### （3）平成九年の改革と宮座の現在

**頭筋の解放** 美保関の宮座の改革は近年では平成七年（一九九五）頃から何段階かに分けて行なわれてきたが、とくに平成一〇年（一九九八）の美保神社の遷宮を控えて平成九年（一九九七）には大きな改革が行なわれた。昭和三十年代から四十年代の高度経済成長期以降、美保関では人口が減少して青柴垣神事の頭家の候補者がいなくなり、一度頭家を経験した準官のなかから仮頭家を出す年が続くようになってきたが、祭りを継続するために、従来、頭筋と呼ばれる約百戸の家々に限られていた株を氏子の希望者に解放することになったのである。それまでも頭筋外の者が自分の子供にも祭りに参加させたいという希望を出していたが、頭筋の家々はそれを拒否してきていた。しかし、頭筋



という家筋を重視しては祭りが成り立たなくなる危機的状況をむかえて、頭筋の家々も株を解放して、座の祭りから氏子の祭りに変えることで意見が一致したのである。

頭筋というのは旧家であり、頭筋であることが一つの格をあらわしていた。「頭を開くことは大事なことだ。大切な祭だ」と折にふれて家族に語ってきている家とそれを語ることはない家とがあるが、実際に頭家、頭人をつとめてみると、家の雰囲気のようなもので差がでてくると感じている年配の人も多い。

それ以前から宮座の担い手たちの事情に合わせて変更が重ねられながら伝承されてきたのは事実である。たとえば、前述のように、現在、神社の参道の西側にある頭人宮は、昭和三十七年（一九六二）までは頭人の自宅の二階の八畳の部屋にまつられ、毎月一日、七日、十五日、二十八日には大勢の参拝客が来て参拝したものだという。しかし、頭人の自宅を使用しにくくなってきたために常設の頭人宮が建てられたのである。同じ頃、青柴垣神事も一の頭家、二の頭家それぞれの家に大棚を飾って人々の参詣を受け神事を行っていたのが、両頭家合わせて神事会所に大棚を飾って神事を行ない、直会も合同で行なわれるようになった。

そしてやはり昭和四〇年頃までは、頭家、客人頭、頭人は潮かきといえは本当に海水に入って身を清めてから神社への日参を行っていたが、それも風呂場で湯を浴びるように簡略化されていった。美保関の人は「神主さん」たちが日参する時間には遠慮して外には出ないよう心がけていた。それは「神主さんに会ってほしくない」という気持ちがあったからだといひ、また「神主さん」たちも人に会いそうな時にはさっと傘で身を隠していたという。

また、昭和三十六年（一九六一）頃には、それまで頭家が親戚などの協力を得て行なってきた祭りの寄付金集めが難しくなってきた。そこ

で、新たに神事奉賛会が結成され、青柴垣神事に関する資金援助を行ない、頭家の負担を軽減することになった。神事奉賛会は上官と準官の家々によって構成されており、頭家の仕事の一部を負担し、頭家の役割を軽減するとともに、青柴垣神事で頭家を拝礼する時に参拝者から供えらるるお金と蝶形の扇の頒布代金を神事奉賛会の資金とすることとした。現在では、神事奉賛会は祭りの執行のための労働力の確保と資金の確保との両者を行ないながら、宮座の補助組織としてなくてはならない存在となっている。

現在、頭家の指導を行ないながら、頭家の仕事の神事奉賛会への一部負担を調整する役として世話人がおり、上官の中から六名がつとめている。自発的に神事に奉仕する意思をもっている人物が推薦され、美保神社からは神事奉賛会理事として任命されている。この世話人が近年最も苦勞しているのは翌年の頭家候補者の依頼と説得であるという。「世話人の方でこの仕事は受け持つから頭家をつとめてほしい」というお願いをしなから、若者のいる家を訪ねて歩いている。勤め人が多くなっておき、神事の前後に会社を欠勤するのが負担となっているため、世話人のほうで提案し、神事の前後でも必ず宮座へ出仕しなければならない日を減らしているという。頭家のなり手がいないのは一番困ることだが、頭家というのは頼まれてお願いされて受けるというのでは本末転倒だという意見も聞かれるなかで、世話人が粘り強く交渉を重ねているのである。

このように頭家や宮座の担えなくなった部分を世話人の指導と神事奉賛会の協力によって、何とかして伝統的な神事を維持していこうという工夫がなされているのが現状である。そこに、青柴垣神事と諸手船神事を残し伝えようとしている美保関の人びとの姿がみえてくる。はなやかな祭礼とにぎやかな見学者たちの背後で、伝承の維持のために日々努力する地元の人たちの奉仕の心とそこから発せられる力がみえてくるのである。

**祖父も父も** 平成一二年（一九九八）の頭人は井上一功さん（昭和

二二年生まれ）であった。井上さんは美保関町役場で当時課長の任に就いていた。一年を通して頭人が出席しなければならない行事は多い。その都度、役場を休んだり早退したりしなければならなかったので大変な苦労があった。それでも井上さんが引き受けたのは、祖父や父が頭人をつとめたときの姿が目に焼きついているからであった。昭和四〇年頃に祖父が頭人をつとめたときは、まだ家に風呂がなかったため風呂場で湯を浴びてから神社に上るようなことはなく、家の前に海に入れる鉄の梯子をつけて冬でも必ず海に入ってから祖父は神社に上っていたのだという。その鉄の梯子はもう使用する人はいないが今も海中につかっている。

平成一五年（二〇〇三）の客人頭は福岡初さん（昭和二四年生まれ）であった。もう神籤はあたらないかと思っていたが、四月に客人頭の神籤があがった。そのとき、福岡さんはちょうどよい機会だと思ったという。なぜなら、彼が兄弟のようにしていっしょに育った従兄弟が三年前に発病し、重い病気で入院中であった。従兄弟が苦しんでいたときだったから、頭家になると自分のことはできないが、人のことであれば祈願してもよいので、宮司に事情を話し、従兄弟からハンカチを一枚預かり、それを客人頭が尺のように持つ扇子にいつも巻いて握って参詣を繰り返して行っていた。

平成一〇年（一九九八）の青柴垣神事の一の頭家は太田毅さん（昭和五三年生まれ）、二〇歳であった。太田さんの父親美春さん（昭和二〇年生まれ）は現在世話人の一人として奉仕を行なっている。太田毅さんの高校の時の同級生はみんな美保関から出てしまい、残っているのは彼一人である。それで父親のすすめもあって引き受けることにしたのだという。青柴垣神事の時は、一の頭家をつとめている自分は雲の上にいるようで、偉くなったような気持ちがした。「美保関にいるならばやはりこういう昔の行事を積極的にやっていきたい」という。

二の頭家は舩谷喜久一さん（昭和三七年生まれ）であった。太田さんとは一六歳も年の差があるが、頭家を開くのはまだ早い、まだ早いと思っていたために遅くなってしまったという。しかし、「祖父もやった。父もやった。先祖からやっているから、培ったものを切りたくない」と思って引き受けた」という。

これらの語りからは、伝統と由緒を背負う人びとの中に醸成されてくる義務感と責任感が伝承を支える原動力となっていることがよくわかる。

**母の力・妻の力** 息子が頭家に当たると、母親が厳しく頭家のつとめを果たさせたという思い出を語る人も多い。現在世話人をつとめている小松久寿夫さん（昭和一一年生まれ）もその一人である。頭家をつとめた一年間は、母親からも「神主さん」と呼ばれていたという。夜、神社へお参りできなければ朝、漁から帰ってからお参りをさせられたという。美保神社の氏子は鶏卵を食べてはいけないという禁忌があるが、そのような食べ物についての注意や、映画館など人ごみに混じってはいけない、人と大皿の料理と一緒に食べてはいけない、等々、頭家には日常生活においても守らなければならないことが多くある。とくに、潮かきを行なうて神社へ参拝するのを三六五日一日も欠かさず行なうのは若い頭家にはつらい修行であり、泣きながらお参りをしていた人もいたという話がよく聞かれる。

宮座のつとめは男性の役目であるが、若いうちにあたる頭家の時にはとくに母親の後押しがあつてこそ一人前にそれが果たせるものだということがよくわかる。

また、福田仁子さん（昭和一六年生まれ）は二五歳のときに、美保関町雲津からこの美保関に嫁いできた。夫の公一さん（昭和一六年生まれ）とは学校の同級生であった。三月に結婚するとその四月に公一さんに青柴垣神事の神籤があがった。公一さんが潮をかいいた後、体が潮でべ

たつくのを流すためのお湯を用意するのが大変だったという。「おかげ」があったのか、一年間二人とも風邪をひかなかった。そして小忌人として神事をつとめた。仁子さんは「私も一緒にやっていかねばならないという気持ちだった。下回りをしておき、いい具合にこの行をやっていかなくてはと思った」という。

このように頭家の神籤があがると、未婚の若い息子には母親の協力が、既婚の男性の場合にはその妻の協力が不可欠であることがわかる。

**次の世代へ** 美保関で福岡旅館を営む福岡隆さん（昭和二十九年生まれ）は、三人の子供たちに、「世界中どこに行ってもいい、しかし故郷に軸足を置いておくこと」を折にふれて言ってきたという。長男は美保関を出て、埼玉県で仕事をしているが、福岡さんは頭家の神籤が長男に上ったら、父親である自分が代理人として神社への参詣を行ない、お祭りの時にだけは帰ってきて、潮をかい、お宮に上ってつとめをするように話している。しかし、準官に入った後、次の客人頭の神籤があがった時は、もう代理はできないから、その時は何があろうと本人に帰郷してもらい、客人頭をつとめてもらう、という。しかし、その後、平成一九年（二〇〇七）に、長男家族が帰郷し、平成二年（二〇〇九）には青柴垣神事の頭家をつとめることになった。

平成一五年（二〇〇三）の頭人、北國恵久さん（昭和三〇年生まれ）は住居は美保関であるが、大根島で醤油製造工場を営んでいる。彼は「一番大事なことは祭りの仕組みが続くことである。何を続けて何を変革させていくか。やっている自分たちが考えていくこと」だという。

**伝承の原動力** このように、美保関の青柴垣神事と諸手船神事を担う人びとの姿を追いつつ見えてきたのは次のことである。伝統的な儀礼は一種の「容器」だといつてよい。そしてその中には、奉仕の心も入れば、娯楽の心、信仰の心、それこそ参加者の数だけ多様な心が、伝統的な儀礼という容器にはこめられる。青柴垣神事と諸手船神事を続けていかな

ければならない、この美保関の人びとをそのような気持ちにさせているのは何か。それは一つには、やはり先に紹介した舩谷喜久一さん（昭和三十七年生まれ）の語る「祖父もやった。父もやった。先祖からやっているから、培ったものを切りたくないと思って引き受けた」という言葉によくあらわれている。そのように世代から世代へと継いできた伝承の力、これこそが現在もこの神事をやろうとする人びとの原動力となっているのである。そしてもう一つは、美保神社の「おかげ」への感謝の心と祭祀への奉仕の心である。それが美保関に住む人たちの日常生活のなかに根付いていることである。青柴垣神事の祭具の一つである紙でできた龍辰の足を細かくして飲めば足がよくなる、八月の虫探神事の時に面を撫でた紙（お撫で紙）で腰など痛いところを撫でればすぐに治る、子供がたんこぶを作ったときは諸手船神事後の直会の席で回されるオハジキと呼ばれる米の粉を固めたものをつばで柔らかくしておでこに貼り付ければすぐにハレがひく、お下がりの御供の米を朝の御飯にちよっと入れて炊いて食べれば漁や旅行に出ても安全である、等々、美保関ならではの信仰心とそのご利益が伝えられている。毎日、頭人の美保神社への参拝が行なわれ、毎月一日、一〇日、二八日の夜には客人頭による六社参りが行なわれる。そして頭家も神社への参拝を行なう。ここでは神社への奉仕と日常生活とが非常に近い関係にあり、それはあたかも絶妙な組み合わせの祭祀と世俗の入れ子細工にたとえることができる。

## ② 佐太神社の祭礼

### （１） 社人組織の解体

佐太神社といえ、佐陀神能<sup>①</sup>、御座替神事、神在祭<sup>②</sup>などで知られる神社である。



『出雲国風土記』の秋鹿郡の条に「神名火山」とあり、「謂はゆる佐太の大神の社は、即ち彼の山下なり」と記されているが、この佐太大神の誕生の地は加賀潜戸かかのくへどといわれる。『出雲国風土記』嶋根郡の条には、「加賀の郷（中略）佐太の大神の生れまししところなり」とある。また、その誕生をめぐっては、母神である支佐加比賣命が「闇き岩屋なるかも」と詔りたまひて、金弓もちて射給ふ時に、光加加明きき」という黄金の弓矢の伝説がある。現在の神社の祭神は、中殿に佐太大神と伊弉瓊いざなみのみこと諸尊、伊弉冊尊いざなみの二柱、北殿には天照大神、南殿には素戔すさの鳴尊がまつられている。

**社内と社外** 江戸時代には出雲国の各神社は、杵築大社つまり出雲大社の触下と佐太神社の触下に二分されていた。<sup>(3)</sup>佐太神社の触下は俗に三郡半の触下といわれ、秋鹿郡、島根郡、楯縫郡の三郡と、意宇郡の西半分の神主であった。五つの触下には幣頭と呼ばれる、郡内の神主をまとめる役があり、秋鹿郡は吉岡、島根郡は石川、楯縫郡は河瀬と常松、意宇郡の西半分は遠藤であった。これら三郡半の神主が佐太神社の祭礼に社外として参加し、奉仕していた。<sup>(4)</sup>

佐太神社では江戸時代まで社内社内の主な組織として、正神主、権神主、別火を「佐陀三神主」といった。その他、社内の中心的な家として、上官と呼ばれる神主家があった。現在は宮川、幡垣、木村、福田の四家である。上官は本殿の左右に位置する北殿と南殿の社および摂末社への奉仕、社内の社人の指揮監督、社殿の修理や中屋敷の管理、会計などを行っていた。

また社人と呼ばれる神社に奉仕する家が約三〇軒あった。慶長頃から社領が減ったため、三〇人に減り、そのため一人で何役もしなければならなくなったという。朝山宮司家が保管している弘化二年（一八四五）の地図を見ると、これら社内の家々は神社の近くに屋敷を構えていたことがわかる。

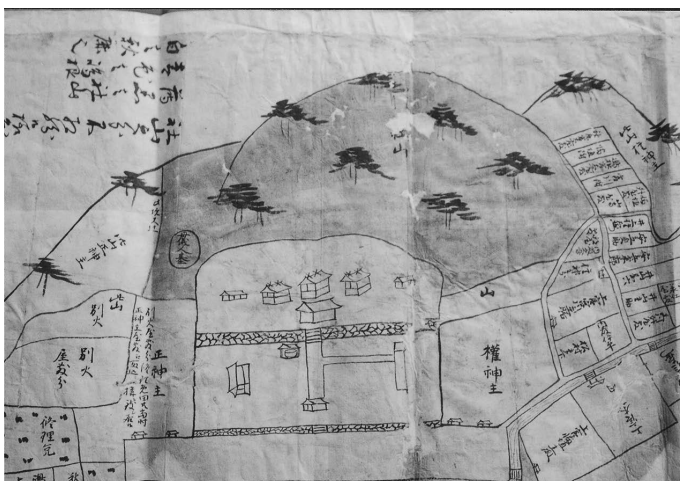


写真4 弘化2年の地図（部分拡大）

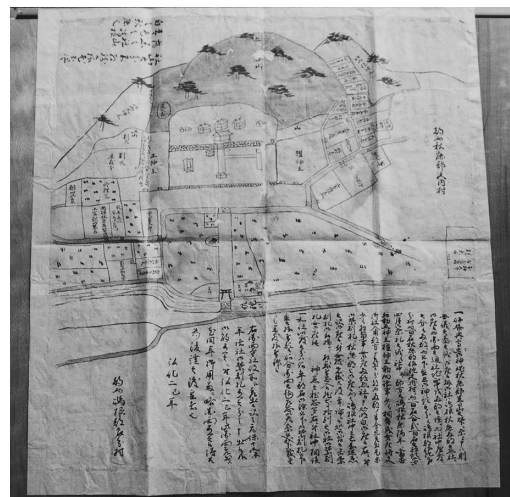


写真3 弘化2年の地図（朝山宮司家蔵）

別火は磯崎家が家職とし、毎朝潔斎を行なってから神社にあがるが、その途中で村人に出会おうともう一度引き返さなければならなかったため、人々は別火に出会いそうになると道を引き返したともいう。別火は主として御神饌のことをつかさどっていた。その下にいる御盛の祝が御神饌の調理を行なった。神在祭に、恵曇浦の板橋家から龍蛇様が社頭に届けられると別火がそれを扱うなど、この神事への奉仕は別火が中心となつて行なっていたという。明治になって別火は神社を離れ、古文書も失われたため、具体的な職務の詳細については不明な点が多いという。

明治になって、社内の社人の組織も三郡半の触下の組織もすべて解体した。そして、その後は現在に至るまで、朝山宮司家を中心として、近隣の神主の人たちが佐太神社の祭祀を支えている。現在は、尔佐神社（美保関町千酌）の塩田晴実さん、国司神社（松江市長江町）の幡垣平次さん、鷹日神社（松江市東津田町）の稲原秀文さん、菅原天満宮（穴道町）の菅野孝興さん、御津神社（鹿島町御津）の岸悟さんの五人の神職が神社への奉仕を行なっている。そして現在も社人の一人として御盛の祝をつとめている内藤康夫さんは古伝祭の熟饌の調理や神事の準備を行なっている。佐太神社の熟饌は特殊なもので、代々内藤家で奉仕してきている。

また、上官の一つである幣主の祝、宮川家は神能の創始の家と伝えられている。慶長一三年（一六〇八）に宮川秀行が上京し、吉田家より裁許状を受け、能を習って帰ってきたといい、やはり上官で注連の祝の幡垣家とともに図って神能をつくり上げたという。もともと佐太神社には七座神事という神楽と真神楽（しんのかぐら）はあった。そこに新たに神能という仮面劇をつくりあげて、触下の神主に覚えさせたのだという。御座替神事の中には、二四日昼頃から郡ごとに社頭に集まって、神楽が舞われた。そして翌二五日の祭りへの奉仕を行なったため、一日一夜の御神事ともいわれたという。

ここでは、これまでそれぞれ独立した行事として考えられてきた御座替神事と神在祭とについて、神社の一年の年中行事における相互の関連性の指摘が可能ではないか、また近代になって神社の組織が大きく変わったその中で朝山宮司家と近隣の神職や社人らの協力によってどのように神事が継承されてきているのか、それらの実態に注目してみたい。

## （2）年間祭事

現在行なわれている佐太神社の主な年間祭事（表3）を朝山芳園宮司による「佐太神社の祭祀について」〔重要文化財 佐太神社―佐太神社の総合的研究― 鹿島町立歴史民俗資料館、一九九七年〕と、それに加えて朝山芳園宮司からの直接の聞き取りによつてまとめると次のようである。

これらの行事は明治五年の改暦以前は旧暦で行なわれていた。そして、いくつかの祭事については明治の改暦を機にあるいは戦時中に変更がなされている。

五月三日の直会祭（春祭り）は、秋鹿郡と島根郡が一年交代で当番と客番をつとめて祭りを行なう。現在は午後二時頃から宮司が直会殿で神事を行ない、その後御神酒をいただく神事が行なわれる。舞殿で佐陀三番の舞が行なわれ、同時に庭で獅子舞が行なわれる。戦前の昭和一七年（一九三二）頃までは旧暦三月三十一日に蔵開きを行ない、神事に必要なも

表3 佐太神社の主な年間祭事

月	日	祭典名
1.	1	歳旦祭
	7	七草祭
2.	3	節分祭
	15	管粥祭
5.	3	直会祭（春祭り）
	20～25	裏月のお忌み祭
	31	シワガミ送り
5.	30	夏越祭
6.	15	御田植祭
9.	24	御座替神事
	25	例祭、佐陀神能
11.	20～25	神在祭
	30	シワガミ送り
12.	31	除夜祭

のをもって秋鹿郡なら安達家の本家へ、島根郡なら青山家の本家へと参集した。四月二日に神事内覧が行なわれ、袴、甲冑、流鏑馬の馬などを三神主が検分した。三日は、秋鹿郡と島根郡の各当屋から神社へ「七度半の使い」が行なわれた後、鳥居のところで先に神社にあがる方を決めた。行列が神社に着くと神事が行なわれ、その後、大太刀、小太刀、矢筒をつけた者たちによって盃の神事が行なわれた。そして、舞殿で佐陀三番の舞が行なわれた。

七月一五日の御田植祭は明治の改暦以前は旧暦二月二日の早稲の祭り、二二日の中稲の祭り、二三日の晩稲の祭りとして午後五時から夜祭で行なわれていた。明治までは直会殿で巫女が松を束ねたものを稲に見立てて、お田植歌に合わせて舞いの作法でそれを撒いていたが、現在は小学生と佐陀神能保存会の人が行なっている。九月二五日の例祭は、やはり明治以降、御座替神事の翌日に行なわれることになった。

大きな祭事としては、九月の御座替神事と十一月の神在祭がある。その歴史については、佐陀神社が佐陀荘の莊園鎮守から、広域的信仰圏に立脚する神社へと変質していった過程で、本格的な神在祭の成立（明応四年（一四九五）の佐陀太社縁起、永正九年（一五二二）の佐陀神社社頭覚書断簡）と、秋鹿・島根に加えて意宇・楯縫の四郡にまたがる広域的な御座替神事が戦国大名の尼子経久の命によって始まったことが指摘されている<sup>(5)</sup>。

### （3）御座替神事と神在祭との関連について

**御座替神事** 元は旧暦八月二四日に行なわれていた神事であり、宮司の潔斎は一九日から始まった。まず一九日に宮司が古浦で潔斎を行なう。竹筒に海水を汲み、海藻をとってくる。そして恵曇の海辺の社に拝礼を行ない、竹筒に海水と海藻を入れたホンダワラを一部お供えする。佐太神社に帰ると神社のすべての建物の入口にホンダワラを置く。そし

て、この日から宮司のお籠もりが始まる。二〇日朝、祝の内藤さん<sup>はふり</sup>が鑽り火をきり出すと、この火で、宮司の食事を作り、また潔斎をするための湯をわかつ。宮司は午前中に一回、午後一回、本殿の祭事を行ない、食事を取り、社務所に籠もる。一日が終わると火を消し、また翌朝、鑽り火をきる。宮司は二四日まで二食になる。食事は月のものが終わった年齢の女性が別火で作り、醬油と塩を添えて持っていく。一回作ったものは捨てる。宮司は一日に何度も神社に上がっては下がる。そうするうちに体調が変わってくるという。

九月二四日、御盛の祝の内藤氏によって莫塵が三枚と、オナデなどが用意され、ケヒョウと呼ばれる団子に米の粉をまぶした熟饅<sup>まいでん</sup>が調整される。熟饅は一二柱の神のために二四膳調整される。

夜、舞殿では、佐陀神能保存会によって七座の神事が奉納される。これは剣舞、清め、莫塵、勧請、散供、手草、八乙女の七段からなるが、そのなかで最も重要なのは莫塵舞である。莫塵舞いは剣舞と清めの後に舞われ、北殿、中殿、南殿に奉納される莫塵を持つて順番に三番舞われ、清められた莫塵が本殿に運ばれる。本殿では、朝山宮司以下、近在

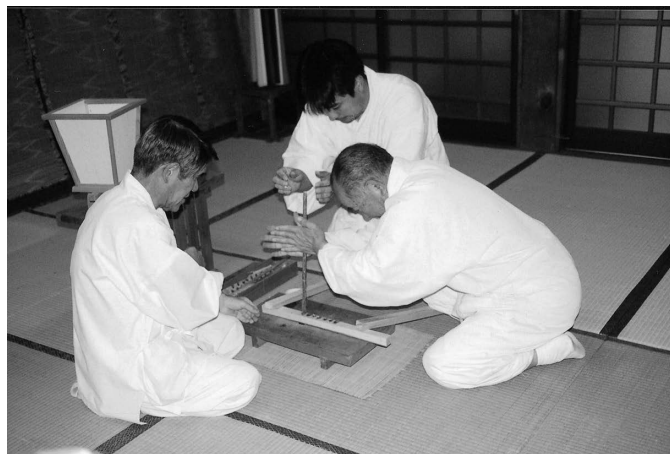


写真5 火を鑽る



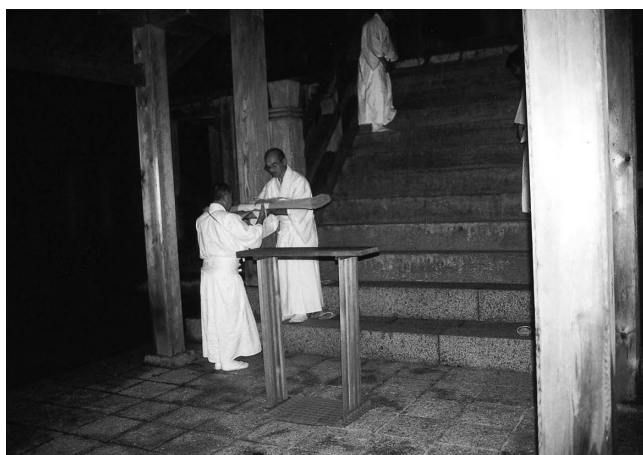


写真6 御座替え神事



写真7 莫座とオナデと熟饌

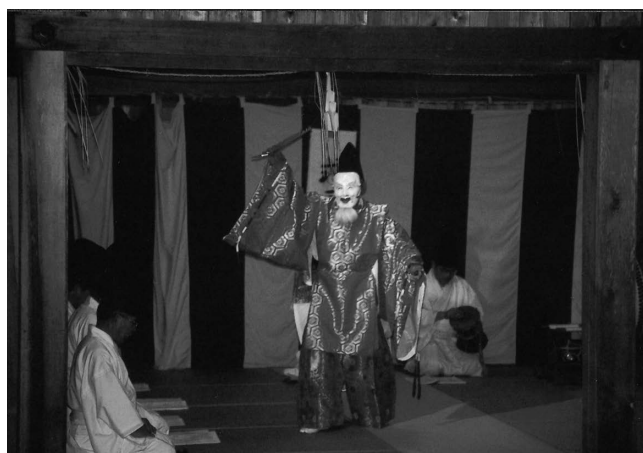


写真8 七座神事

の神職によって北殿、中殿、南殿の順に御座替神事が奉仕される。御本殿の鍵が宮司に渡されると、宮司によって社殿の扉が開かれ、ご本殿の神様の莫座替えが行なわれる。宮司が本殿内に奉仕している間、神職一同は地面に正座して祝詞が奏上される。そして、熟饌が三殿いずれにも運ばれる。南殿の莫座の奉納を終えて、御座替神事は終わる。舞殿における七座の神事舞いと本殿における御座替神事とが同時進行であわせて行なわれるのが特徴である。

神事が終わると、宮司の前で真神楽が舞われ、宮司は御神酒と熟饌とを口にする。その後、祝の内藤氏が提灯の火を持って社務所で宮司の火と合わせる「火合わせ」を行なう。これにより宮司の潔斎が終わる。

翌二五日には、佐陀神能保存会の人たちによって舞殿で佐陀神能が奉納される。まず七座の神事の曲目が舞われる。その後、能の式三番が奉

納される。翁舞は御津神社宮司、岸悟氏が奉仕する。この式三番は法衆として、室町時代の後半に京都方面から伝えられたものと伝えられている。

佐陀神能とは、全体としては、七座の神事、式三番、神楽舞いのことをいうが、狭くは『古事記』や『日本書紀』に題材をとった神楽舞いのことをいう。天照大神の天岩戸の物語、素盞鳴尊の八岐大蛇退治、日本武命の熊襲退治などの演目がそれである。

この神楽は慶長の頃に、社家の一つである宮川家の先祖が伝えたものと語り伝えられている。佐太神社の触下三郡半の各地の神主が祭に奉仕して、自分の村にも神楽を伝えていったのだという。さらにそれが各地に広がり、中国地方の山間部では石見神楽や備後の荒神神楽などとなって変遷を重ねながら現在でも盛んに行なわれている。

このような明治以降の経緯があったが、御座替神事の他にもどのようなにしてこれまでの佐太神社の伝統的な神事を伝えていくか、について考慮されて、大正八年（一九一九）に佐太神社古伝神事保存協会がつくられた。そして、この保存会で神事と神能との両方を行なうことになった。しかし、第二次大戦中にその担い手が減少し、保存協会は自然消滅していった。そうした中でも佐陀神能保存会だけは別組織のように独立して維持された。昭和五五年（一九八〇）に、社殿の造営が終わると、その後、佐太神社の古伝神事についても保存しようということになり、明治以来の流れをくむ古伝神事保存協会を復活させることとした。それは古伝の神事すべてを保存する目的であったが、現在ではその中でも五月の祭り、一月の神在祭など大勢の人がいないとできないものについてとくに保存会の人たちの奉仕によって維持されてきている。

神在祭　島根半島の多古鼻より東の海岸では、旧暦一〇月、「お忌み荒れ」の季節に、龍蛇様と呼ばれる背が黒く腹が黄金に輝く海蛇があが  
る。龍蛇様を何度もあげたことがあるという鹿島町御津の漁村に住む漁  
師の金崎正一さん（昭和七年生まれ）によれば、最初「夜、イカ釣りを  
していたら船のまわりをぐるぐるまわる四〇センチくらいの生き物をタ  
モ（網）で掬い上げた。背は黒で腹は金色に輝いて見えた。年寄りに聞  
いたら、龍蛇様は佐太神社のお使いだから持つて行きなさいといわれて、  
神社まで歩いて持つていった」という。かつては古浦の板橋家が龍蛇取  
りを家職としていたという。その板橋家では今も佐太神社の銘がある板  
木を伝えている。この龍蛇様は火難除け、商売繁盛の福の神として近隣  
をはじめ各地のあつい信仰を集めている。

現在は一月二〇日に社頭において神迎えの神事が行なわれてから、二五日のカラサデ（神送り）神事までが神在祭の期間中で、その間は神社境内にアオキの注連縄が張り巡らされ、土幣が立てられる。神迎えの翌日から神送りを行なうまでは笛や太鼓等歌舞音楽を停止する。

しかし、明治五年（一八七二）の改暦までは、旧暦一〇月一日から一六日に上の斎<sup>いみ</sup>と称する忌みの期間があり、一七日から一九日に中根<sup>なかね</sup>と称する忌みが緩む期間があり、二〇日から二五日を下の斎と称して厳しい忌みが課せられる前後一五日にわたる長い祭りであった。それが短縮されたのであったが、もともと佐太神社では下の斎を重視していたため、現在のように二〇日に神迎えを行ない、二五日に神送りを行なうこととなっている。

また、朝山宮司家の家例として、二五日のカラサデの日にぜんざいと赤貝の入った「のっぺ汁」の二品をつくって祝い、神様にもお供えすることになっている。この地域では正月の雑煮は小豆雑煮だが、その日は朝山宮司家はしょうゆ味の雑煮である。こうして、一般の家々が正月を祝う小豆雑煮が朝山宮司家では正月ではなく、このカラサデの日に食べるのが家例となっているのである。

このカラサデの晩には、「カラサデ婆さんが来るから便所に行かれない。便所の神さんも帰っていくから便所に行く」と言い伝えられてきた。「外に出るな。帰っていく神さんに行き逢うから」と言い伝えられてきた。現在、神送り神事は夜の八時から九時頃に行なわれているが、これは参拝者が増えたためであり、以前は夕方には神事が終わっていた。その夜、帰ってゆく神様に用たしをしたり唾をはいたりするのは不敬だからと考えられていたから、家にいなければならないとされていたのだという。

二五日のカラサデの夜、社頭での神事後、神籬<sup>ひもろぎ</sup>を掲げ、御幣や御神酒をもって、佐太神社古伝神事保存協会の人たちとともに、神社から約二キロ、暗闇の中の山道を神社の西北方に位置する神目山の祭場へと向かう。

祭場では祝の内藤氏によって松の御神木に柳の木の削り掛けが二本、桜の木の皮が二枚、さらに土幣二本が縦に並べられて、それがエノコカ

ズラで三回巻かれる。その前で神々を送る船出の神事が行なわれる。祭場には池と呼ばれる径約一メートルの窪地があり、その周囲に社頭に立てていた御幣を二本立てて注連縄を巻く。そうして中に杉の木の小さな舟を浮かべ、神籬をのせて宮司が小さい声で「カコ、カコ、カコ」と三回唱える。この声を聞いて、神領内の小鳥が三羽死ぬ、そしてカコ（水夫）となって舟を導く、と言い伝えられている。またこの祭場の池は日本海につながっているともいう。そして、御神木の根元には一夜御水が供えられる。この一夜御水を作るのは今でも講武の井上省三家が家職としている。

その後、一月三〇日に、宮司と社人の内藤氏とで、再度神目山へ登り、二五日の神送り神事と同じような作法を行なってすべての神々を送り出すシワ神送りが行なわれる。その神社への帰り道、幣挿しが行なわれる。現在は成相寺との峠の境など五カ所に立てられるが、明治以前には佐太神社の支配領域であった三郡半の境界の二八カ所に幣立て場があり、当時は二日に神在祭が始まることを知らせるためにシバサシが行なわれていたという。

五月二〇日から二五日（元は四月二〇から二五日）に裏月のお忌み祭りが行なわれる。一月と同じように行なわれるが、このときは朝山宮司と内藤氏と近隣の神主が二、三人で行ない、古伝神事保存会の奉仕はなく、一夜御水もない。

**佐太神社の年の更新** 出雲地方で神在祭を伝承している神社は、この

佐太神社（一月二〇日～二五日）の他に、出雲大社（旧一〇月一日～一七日）、日御碕神社（旧一〇月一日～一七日）、神魂神社（一月一日から一八日）、売豆紀神社（二月三日）、多賀（朝酌下）神社（一〇月二五日・二六日）、万九千神社（一月一七日～二六日）、朝山神社（旧一〇月一日～一〇日）、神原神社（一月二六日）の九社が知られている<sup>(6)</sup>。また、朝山皓「出雲神在祭の起原に就いて」によれば、



『万葉集』に「神名火に神離立て、いはへども人の心は守りあへぬもの」(十一巻)とあることなどから、神名火山を上代の神々祭祀の斎場で出雲特有のものであったとしたうえで、「古代出雲族は毎年十一月新嘗会に先立ち十月をもってこの山上の斎場にて初穂の新穀を捧げて天神地祇八百万神を祀った」と述べ、神在祭と新嘗祭との関連を指摘している。しかし、これは新嘗祭を重視する立場からの見解であり、佐太神社の場合、神社の一年の祭事を俯瞰するならば、やはり注目されるのは御座替神事との関連である。

つまり、御座替神事は佐太神社の古伝祭の中でもっともきびしい潔斎と緊張を強いられる重要な神事である。佐太神社に関する研究においては、これまで御座替神事と神在祭とはそれぞれ独立した神事とみなされてきたが、神社の一年という文脈でみるならば、九月の御座替神事は十一月の神在祭で新しい神を迎えるための神事と位置づけることができる。神在祭は、龍蛇迎えによる毎年繰り返される新しい霊力の更新とシワ神送りによる祓え清めの意味をもつ神事儀礼である。そして、前述の朝山宮司家の「のっぺ汁」とぜんざいの家例は、神在祭がこの宮司家と佐太神社にとって一年の循環の上で、新たな年へと更新される正月行事にほかならないということを象徴的に示しているといつてよい。表月の旧暦十月(新暦十一月)の神在祭に対して、それに対応する関係の裏月のお忌みさん祭りが一年を二分する旧暦四月(新暦五月)に設定されているのも、この神在祭が佐太神社の年間祭礼の基準軸であることを明示しているといつてよい。ここには一般的な正月を基準とする年間暦とは異なる佐太神社に特有の一年の循環が存在しているのである。

#### (4) 神社祭礼への奉仕

平成一三年(二〇〇一)・一四年(二〇〇二)の現在 平成一三年から一四年に向かう頃、御盛の祝と呼ばれる役を長年勤めてきた内藤康

夫さん(昭和七年(一九三二)生まれ)が七〇歳を迎えて引退を考えるようになった。内藤さんといえば、これまで長い間、佐太神社のほとんどの神事に際してその熟饌を調整し、また神事全般の準備を行なう役目の家職を担ってきた内藤家の当主である。その内藤さんが神社の世話の仕事の後継の石橋淳一さん(昭和四十六年生まれ)という若者に教えることとなった。内藤さんが御盛の祝を引き継いだのは昭和二十三年(一九四八)のことであった。それから五十年以上が経ち、内藤さんにはこの役目を引き渡すことのできる子供がいなかったため、同じ鹿島町内に住む石橋さんにこの役を引き渡すこととなった。以下は、平成一五年(二〇一三)九月二六日に行なった内藤さんへの聞き取りにもとづく記録のうち、とくに印象的な語りである。

「自分のかかった人、つまり自分の子供に受け継いでもらわなくても、誰かやってくれればいい。そうでないと自分が何十年もやってきたことがむだになる。どなたでもいいから、きちんと私の満足のいくように引き継いでいただければ、私の五〇年やってきたことが大事にされると思っている。内藤家にこだわることはない。そして、神能を引き継いでもらいたい。七座の神事を継承していくことで、神社を祭ることがわかるのではないかと思う」。

「佐太神社では、御座替神事が原点である。一般の人にわかりやすいのはお忌み祭りと呼ばれる神在祭であるが、このお忌み祭りをするためには御座替と七座の神事が原点である」。

「自分の受けたものを誰かに受け継いでもらいたい。ずっと内藤家が<sup>はふり</sup>祝をやっていたわけではないと思う。曾祖父の栄太郎以来、自分までは内藤家ずつとめてきているが、おそらくそれ以前までには、社中でできる人がやる、というふうに戻ってきたのではないかと思う」。

「平成一三年の春のお忌み祭りで若い石橋さんと一緒に山に上がった。平成一四年の春には材料を切りにいくのも彼と一緒に連れて歩いた。そ

うして三回上がって、去年（平成一四年）の秋には、もう石橋さん一人でもよからうと思つて、一人で上がらせた。するとどういうわけか、あのようになすごい雨になった。自分はこれまで傘をもつて神ノ目山に上がったことは三回とない。何かあると、自分は潔斎が何か足りなかったのか、と考えてみる。潔斎はしてもこれで十分ということはない。それが潔斎というものである」。

「おとし（平成一三年）、九月二〇日から二四日の間、毎朝、宮司の参籠のみ火が出なかった。新宮幸雄さんと新宮嘉夫さんと、それに石橋さんと私（内藤）とで火を鑽っていた。朝七時に集つて、一〇時にやつと火が出たが、手の皮がむけてぼろぼろになつてもなかなか出なかった。途中、休んでもう一度やった」。

「この仕事は自然にのめりこんでいく。自然に怖さを感じていく。ずっと入つていつてどういう気持ちになつていくか。それは、あの人（後継者の石橋さん）がこれから自分で考えること。石橋さんには「わしはこういうふうにやってきたがなあ」というふうな言い方をしている。石橋さんはそれをノートに書きながらいま覚えている。自分はかつて「すみません、すみません」といいながら、先輩のやることを見ながら覚えてきた。この点が今の若い人は違うなと思う」。

そして、内藤さんは、若い石橋さんには「祭りごとは実際その場で身体でもつて覚えて、身体が自然に祭りを動かすようにならんとね。技術的にこうだこうだというのは見て覚えることで、あなたはそれを身体で覚えてください」と常々言っているというのである。そこには五〇年以上という自分自身の長年蓄積された奉仕経験への反省と自信との綯い交ぜ的な達成感が表出されていると同時に、加齢と引退と次世代の無知識無経験の若者への役割交代へという不可避的な現実の前に、不安と期待との綯い交ぜ的な諦観とが表出されているといつてよい。内藤さんの神社祭祀への奉仕の心は、内藤さん以外の誰のものでもないと同時に、新

たな石橋さんがまた一人で自らの体験の中で創り出していくものである。それが、はたして五〇年以上続くか何年続くかそれは別問題として、奉仕者自身の成功と失敗の経験の積み重ねの中に創り出され、また伝えられていく独自性と共通性をもつものであるということが、これらの内藤さんの語りやまた多くの祭礼への奉仕の実践の中から読み取ることができるのである。<sup>(8)</sup>

## 論点

本稿の主要な論点をまとめるならば、以下の三点である。

第一、美保神社や佐太神社のように歴史の深い神社には、その神社に特有の時間が存在する。それは社会的にすでに一般化されてそれ以外には存在しないかに思われている正月を区切りとする一年のリズムとは別のものである。一年という時間の循環は、神社に奉仕する現実の人間と彼らが世代を重ねて想定してきている神霊との交感の世界に、それぞれ神社ごとに歴史的に刻まれ伝承されている。

第二、美保神社の青柴垣神事と諸手船神事、佐太神社の御座替神事と七座神事、神在祭という伝統的な祭礼の両者に共通する現在の課題は、それら古伝祭といわれる由緒ある神事祭礼の担い手の不足という現実問題である。そのような危機的状況のなかで、美保関の人々にとつてはとくに春の青柴垣神事を行なうことが彼らの自己確認と存在証明であり、佐太神社ではとくに御座替神事と七座神事、神在祭とを行なうことが彼らの自己確認とその存在証明となっている。そして、伝承の維持のために選択されたのが、美保関では頭筋、佐太神社では社人という伝統的な家柄にこだわらずに、自発的に奉仕を希望する人物を迎え入れるという方法である。残すべきものと捨てるべき者との選択、それこそが伝承の宿命であるといつてよい。

第三、神社祭祀はそれに携わる人びと個々人の「奉仕の心」に支えられている。その奉仕の心の獲得のためには、集団的に共有される一定の環境設定が必要であると同時に、個々人の初発の意思とその後に継続される経験の中で獲得される技術と信念により、それは実践者一人ひとりの存在証明となっていく。神社祭祀の伝承世界で継承されているものとは、眼に見える技術や技能であると同時に眼に見えない意識や心意である。そして、その現場から読み取ることができるのは奉仕の経験の蓄積の中で創り出される参加者個々人と、その集団的な次元での思惟と行動の「独自性と共有性」という枠組みの中で再生産されている創造性に満ちた伝承力である。そして、それは、現在だけでなく、かつて社人組織の解体という明治初年の神事祭礼の存続の危機にあつてそれを救った力でもあったといつてよい。

註

- (1) 佐陀神能については、本田安次『神楽』（本田安次著作集）二 錦正社、一九九三年（一九六六）、同『日本の祭りと言能』錦正社、一九七四年、石塚尊俊『西日本諸神楽の研究』慶友社、一九七九年、鹿島町立歴史民俗資料館『舞う 重要無形民俗文化財 佐陀神能』（特別展図録）一九九四年、などの研究がある。
- (2) 神在祭については、朝山皓「神在祭について」『神道史学』四、一九五三年、井上寛司「佐太神社における『神在祭』の成立」（教育研究学特別経費による研究報告 一九九一年）、品川知彦「佐太神在祭考」（『論集』印度学宗教学会二三、一九九六年）、同「出雲神在祭の歴史と解釈」（『出雲大社の祭礼行事』一九九五年）、石塚尊俊『神去来』慶友社、一九九五年、新谷尚紀『神々の原像』吉川弘文館、二〇〇〇年）などの研究がある。
- (3) 以下の伝承は宮司の朝山芳国氏からの聞き取りによる。
- (4) 新谷尚紀『神々の原像』吉川弘文館、二〇〇〇年、一〇三ページ
- (5) 井上寛司「中世佐陀神社の構造と特質」（『重要文化財 佐太神社―佐太神社の総合的研究―』鹿島町立歴史民俗資料館 一九九七年）
- (6) 石塚尊俊『神去来』慶友社、一九九五年、三三〇ページ
- (7) 朝山皓「出雲神在祭の起原に就いて」『国学院雑誌』三九―二、一九三三年
- (8) たとえば、神社におつとめされる方々の奉仕の心については、厳島神社、八坂

神社においても実感されたところである。平成十三年（二〇〇一）五月末、私どもは宮司の野坂元良氏のお計らいで、明治以来連綿と記録されてきた社務日誌を閲覧する機会をいただいた。そこには、当時、社家としてつとめておられた飯田楯明禰宜や福田道憲禰宜の先代、先々代の方々の名前が記されていた。この社務日誌は今でも宿直の神職の方が毎日交代で書くことになっているという。宮島に住まい、神社に奉仕されてきた由緒ある家々の子孫が今またその役目を果たしているのである。そして、たびたびの台風被害の復興に力を尽くされ、春と秋には学芸員資格も有する飯田氏と福田氏を中心になって社務所に隣接する収蔵庫を利用して貴重な宝物の閲覧の機会を提供してくださっていた。これらの方々の神社と社宝を無事に守り伝えようとする責任感にあたかも社家の代々の由緒に後押しされているかのようなとても強いもののように思われた。そして、神事のおつとめだけでなく、舞楽の際には奏楽者となり、神社伝承の宝物や古文書の管理も行われる姿には、神社のもつ多面的な文化的性格はそこにつとめておられる方々の多才な能力とたゆまぬ努力に対応していると気づかされた。

また、八坂神社の例である。平成十三年（二〇〇一）二月、当時八坂神社宮司でいらつしやつた真弓常忠氏（現住吉神社宮司）と現在八坂神社宮司、森壽雄氏のご理解をいただいて、京都精華大学の小椋純一先生のご指導のもとに神社境内にある直径三〇センチメートル以上の太さの樹木を一本一本すべてその種類と胸高の直径を調査させていただいた。その結果、樹木は比較的短期間に成長するため、樹齢三〇年くらいのものがほとんどであることがわかった。また、樹木の種類は現在ではクスノキなどの常緑広葉樹が多くなっており、その昔たくさん見られたという松の木や杉の木は少数になっていることもわかった。神社の社は永遠のものではなく、木々の成長と衰退が繰り返され、植生は時代とともに変遷しているのである。

平成十四年（二〇〇二）四月、八坂神社では平成の大造営が行なわれた。世の中はバブル経済がはじけて不景気になってしまっていた。そのような時代の大造営のご苦労は大変なものであったことは想像に難くない。しかし、当時の真弓宮司と現在の森宮司の並々ならぬご尽力のもと、経済界や神社関係者、それに奉賛会、清々講社をはじめ氏子の方々々が協力して達成された。神社本殿という巨大な建造物を維持していくために、定期的に行なわれる御造営である。前回昭和三十九年（一九六四）に行なわれた。今回も葺きかえられた檜皮葺きの大きな屋根は堂々と実に美しく輝いていた。京都の町の方々の協力があつてこそ、この建造物を維持されていくことを知った。明治八年（一八七五）に設立された八坂神社氏子奉賛会の会長を長年つとめている中川文一郎氏は「神社のことは断つたら、ばちがあたる」と思つて会長という大役を引き受けたが、今では「会長をつとめさせてもらっているのも神様のおかげ」という気持ちだといつておられ



た。このように神社の杜の木々は変わりゆくものの、宮司様をはじめ神社側と氏子の方々との、ご本殿の維持への努力、そして何よりもこれまで幾世代をも超えて祭られてきた神社の神様への奉仕の気持ちは、時代をこえて受け継がれているものであることが実感された。本基幹研究の推進とそれに連動して開催した本館の企画展示「日本の神々と祭り―神社とは何か?―」（二〇〇六年三月～五月）の準備の過程で多くのことを学ぶことができた。

（国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系）

（二〇〇八年六月一七日受理、二〇〇八年七月二九日審査終了）

## **The Power of Tradition of Shrine Rituals : Rituals at Miho and Sada Shrines**

SEKIZAWA Mayumi

Folklore research to date on shrine rituals has combined studies on rituals at relatively well-known shrines, for example Taro Wakamori's "Studies on Miho Shrine," with studies on ujigami (guardian deity) rituals in small villages. This paper examines the power of traditions of rituals at shrines with relatively long histories whose traditions have been passed on through participation by the local community and which have priest associations that are affiliated with rather large shrines like the one mentioned above. The study focuses on the leaders of rituals held at Miho Shrine located in Mihonoseki, Mihonoseki-cho, Matsue, Shimane Prefecture, and Sada Shrine located in Sadamiyauchi, Kashima-cho, Matsue, Shimane Prefecture.

Three main issues arose in the course of this study. First, a general survey of the annual events at Miho and Sada shrines reveals the existence of an annual calendar unique to each shrine that is different from the normal yearly sequence that begins with the New Year. Miho Shrine's yearly cycle begins with the Aofushigaki ritual in spring and ends with the Morotabune ritual in winter. At Sada shrine the Gozagae purification ritual is followed by the November Kamiarimatsuri ritual, which welcomes the 'kami' and then bids farewell to them, during which time the important New Year begins.

Second, a current problem facing both the Aofushigaki and Morotabune rituals at Miho Shrine and the Gozagae and Kamiarimatsuri rituals at Sada Shrine is the shortage of leaders for the Kodensai, a long-held tradition. Despite this critical situation, however, the holding of the Aofushigaki ritual in spring in particular affirms the identity of the inhabitants of Mihonoseki, just as the Gozagae and Shichiza rituals of Sada Shrine affirm the identity of its parishioners. It is for this reason that these rituals are continued by welcoming people who spontaneously wish to volunteer, despite the fact that the sentiments of traditional families – called Tohsuji in Mihonoseki and Shanin at Sada Shrine – continue to be passed down.

Third, the shrine rituals are sustained by the people involved in the rituals and the spirit of individual volunteers. The creation of a specific environment shared by the group is necessary in order to acquire the spirit to volunteer. At the same time, the individuals who take part also acquire this spirit from their own initial intentions and the techniques and beliefs acquired in the subsequent ongoing experience. In the traditional world of shrine rituals, traditions that are passed on consist of both tangible techniques and skills and intangible feelings and spirit. What we see at these shrines is the power of tradition brimming with reproduced creativity within a framework of "distinctiveness and solidarity."

---